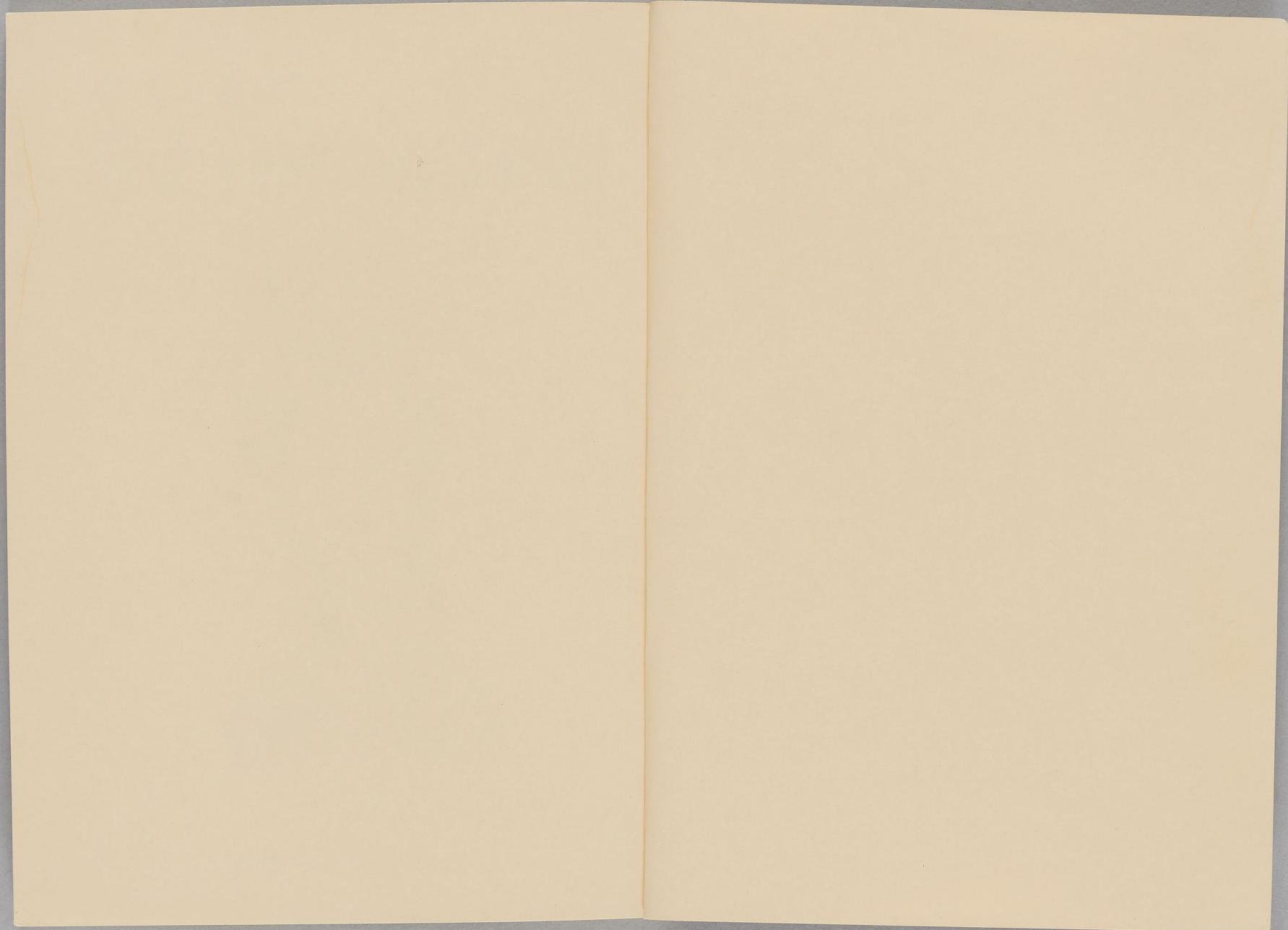


かもじま町の
歴史とゆたかな文化財





かもじま町の 歴史とゆたかな文化財



天 狗 久 作

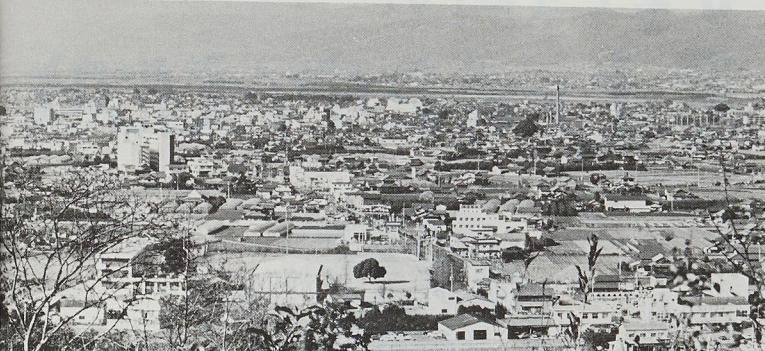
(深見定一所蔵)

鴨島町教育委員会

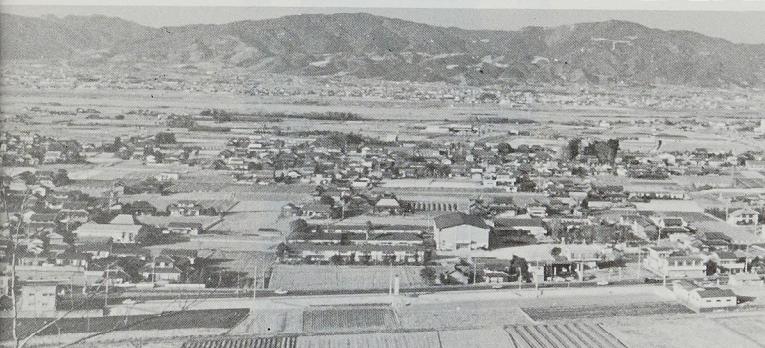
向麻山から



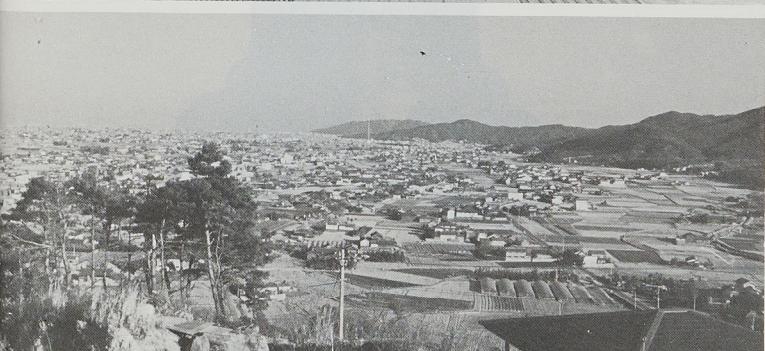
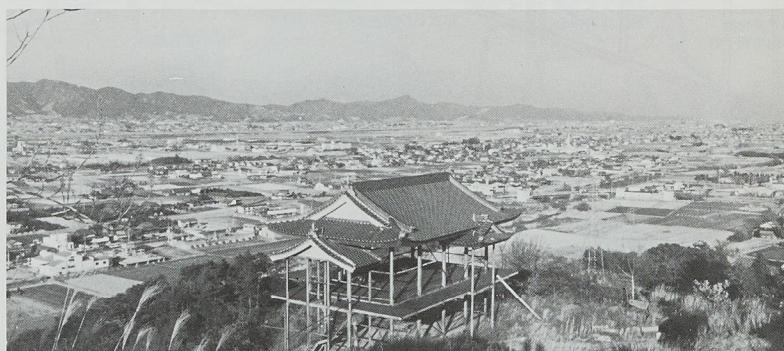
鴨島町を望む



西 方 の 街 並



北 方 の 街 並



東 方 の 街 並

鴨島町の史跡・文化財の図





「かもじま町の歴史とゆたかな文化財」発刊に寄せて

鴨島町長 戸 田 稔

自分が生まれ、育ったふるさとほど懐しく思い出深いものはないと思います。私たちは常に郷土を見守り、繁栄を願っているものであり、ふるさとこそ私たちの生涯を通じて豊かな心と生命を与えてくれるものであります。

私たちの鴨島町も旧町村合併して三十年の歳を重ねました。こうして、うけつがれた歴史の流れの中で人々の姿はみなそれちがつても、その時代時代に人々は美しい伝統を生かし、輝かしい足跡を残して來たのであります。

このたび待望の「かもじま町の歴史とゆたかな文化財」が発刊されることは誠に意義深く喜ばしい限りであります。古い歴史をふり返り、うけ継がれた有形無形の文化を探りみることはすばらしいことであります。どうかこの本を愛読され、豊かな心の糧にしていただければ幸甚に存じます。

本書発刊にご尽力いただいた関係各位に深く敬意と感謝を捧げます。

発刊にあたつて



鴨島町教育委員会教育長 新居憲生

幼いとき祖父の膝の上で聞いたふるさとの民話や伝説。四季おりおりの郷土の行事。昔の人々の生活の知恵をしのぶ民俗資料。村の辻や道ばたの石像や板碑。古いお寺や神社の建物。天までとどく大樹の姿。私たちはこのような多くの文化財に囲まれ、人の心のぬくもりや郷土の歴史の重みを感じながら育ちました。文化財はその土地の住民にとって祖先の大切な遺産であるとともに豊かな心を育てる糧でもあります。このたび町内にある文化財を再確認するとともにそれらを町の歴史の流れの中に位置づけてそれぞれの文化財の意義を見出して行こうということで「かもじま町の歴史とゆたかな文化財」と題して本書が刊行されることになりました。

地方の時代と言われる八十年代、本書によって町の歴史と文化財に理解と関心が高まり郷土を愛する心がより深くなることを期待いたします。

最後になりましたが、本書の企画・執筆・編集に当たられた皆様方の御労苦に敬意と感謝を捧げます。

ごあいさつ



編集委員長 植村芳雄

昭和五十四年「飯尾敷地むかしむかし」が、昭和五十七年に「風土記にしおえ」が出て、町内その地区的歴史や物語が発掘、紹介されましたが、町文化財保護審議会委員の間で、最近は一般的傾向として郷土を愛する心が次第に薄くなりつつあるように思われる所以、郷土のよきを知ついただき、真にふるさとを愛し育てていくようには、ふるさとの発展の歩みや、町の宝である文化財を充分に知つていただくことが必要であるとの声が出て、委員に、それぞれの時代や項目の分担をしていただき、十一月末にその原稿が全部揃いました。

十二月一日より小学校、中学校の先生方や教育委員会の方々にお願いして編集にとりかかり、その際児童・生徒にも読まれるように幾らか表現を変えさせていただきました。

この度待望の本書をお蔭で完成することが出来ました。
これひとえに編集委員の方々をはじめ、関係方面のご協力によるものでありまして深くお礼を申し上げますと共に、町民の皆様にこの本を充分にかみくだいて読んでいただき、ふるさとの良さを認識していただることをお願い申上げます。

もくじ

第一章 鴨島のあけぼの	1
第一節 無土器時代	3
1、鴨島の土地はいつできたか	3
2、鴨島の土地に人はいつごろから住みついたか	7
第二節 繩文時代	10
第三節 弥生時代	13
第四節 古墳時代	17
第五節 飛鳥・奈良時代	31
第六章 平安時代	37
第七章 鎌倉時代	45
第八章 南北朝時代	61
第九章 飯尾氏の活躍	63

2、阿波における南北両朝の戦
3、戦乱を支えた農民
66

第六章 室町時代

- 1、飯尾一族
71
2、農民の食事
81
3、仙光寺文書
84
4、鴨島の城塁
88
5、脇城外の合戦
104
6、中富川の合戦
112
7、鴨島の武士と子孫の運命
122
8、室町時代の文化財
126
1、新しい水田の開発
131
2、藍作と集落
132

第七章 藩制時代

第一節 藩制時代の村や町

- 3、街道の集落
134
第二節 蜂須賀入国と政策
135
1、検地のこと
135
2、土地の利用と生産力
141
3、刀 狩
151
4、駅路寺と福生寺
152
5、藍作と吳島
153
6、切支丹の宗門改め
154
7、棟付帳
155
8、小作料と農民の反抗
160
9、御用金の調達と身居
170
第三節 人々の信仰
172
1、四国遍路と遍路道
175
2、野の神や仏たち
183

第八章 現代

第一節 政 治

- 1、行政区画と呼称の変遷
2、財 政
3、建 設
185 188 189 197 199 206 212 213 215 217 219 221 223

第二節 産 業 経 済

- 1、藍 作
2、養 蚕 と 製 系
3、酪 農 か ら 蔬 菜 園 芸 へ
185 188 189 197 199 206 212 213 215 217 219 221 223

- 4、商 業
5、交 通
185 188 189 197 199 206 212 213 215 217 219 221 223

第三節 社 会 生 活

- 1、ふれ合ひの生活
2、災 害
3、農 民 運 動 と 農 地 改 革
185 188 189 197 199 206 212 213 215 217 219 221 223

第四節 文 化

- 185 188 189 197 199 206 212 213 215 217 219 221 223

第九章 人 物

- 1、飯 尾 常 房
2、志 士 藤 井 藍 田
3、庚 午 事 变 志 士 滝 直 太 郎
4、大 蔵 大 臣 藤 井 真 信
5、運 輸 大 臣 岡 田 勢 一
6、國 會 議 員 川 真 田 市 兵 衛
7、國 會 議 員 川 真 田 德 三 郎
8、國 會 議 員 須 見 千 次 郎
9、德 島 県 知 事 阿 部 邦 一
10、大 僧 正 泉 智 等
306 305 305 304 304 303 302 302 301 301 299 289 238 223

第一章 鴨島のあけぼの

- 11、画家 近久雪嚴・河村季軒・林雲谿
12、吳鄉文庫 石原六郎
13、俳優 曾我廻家五九郎
14、石油王 松村善藏
15、実業家 近藤廉平
16、実業家 和田嘉衡
17、実業家 工藤鷹助
18、中正曆發明創始者 工藤茂三郎
19、県議会議長 川真田郁夫
老樹名木一覽表
歴史年表
補説
324 315 313 312 311 310 309 308 307

第一節 無土器時代

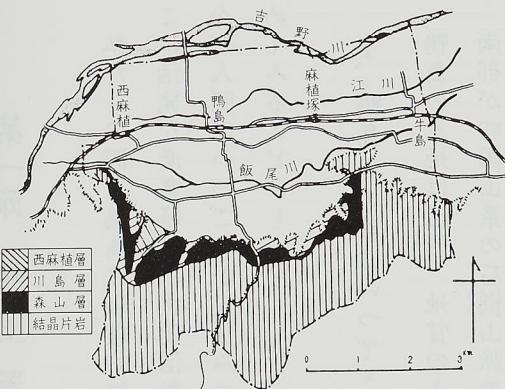
私たちの郷土鴨島は地理的位置、地勢、気候など自然の環境に恵まれ、そこに活発な産業経済、文化活動が展開されているが、この土地はいつできたり、人間はいつごろから住みついたかを、地質学や考古学などをもとにまとめてみることにした。

1、鴨島の土地はいつできたか

鴨島の土地は地形、地質の上から三つに区分される。

南部が四国山系の石槌山脈の山地であって、その北麓一帯に洪積層の台地があり、その北に町民の大部分の活動の場になつている沖積層の平地がある。南の山地は、今から二億年前に地殻に激しい変動があつて、日本列島の最

初の形（今の列島の形とは大きく異なつてゐる形）が海上に出現した時の土地である。その後、幾多の地殻の変動があつたが、南部山地の岩石は二億年の歴史をもつてゐる。



鴨島町地層略図

この山地の北のすその一帯が森山層と名づけられている洪積層の台地であつて、今から二〇〇万年ぐらい前から地殻の隆起を主とする変動によつてできたものであり、人類が出現し生活が始まつた地層である。

なお、鴨島町の地質は上図の地質要図の通りであるが、この地質のうちの森山層（厚さ約50メートル）の中は、

る。この亜炭層は、明治初年、付近の人が井戸掘中に発見して燃料に使つていたが、第一次世界大戦および第二次世界大戦中には燃料不足のためこれを採掘していた。

そして、この層の中から動物・植物の化石などが発掘されていたが、昭和三十二年（一九五七年）二月に大阪市立大学の池辺、三木両教授グループや徳大の中川教授などの指導のもとに大阪朝日新聞社、その他有志の賛同を得て大規模の発掘を地元の人々の協力により行つた結果、前々からの出土品と合わせて、

- 旧象のものと思われる尺骨、橈骨、犬歯（牙）の先端
- 鹿の骨格と臼歯
- ビビパラス（巻貝）、アノドンタ（二枚貝）
- 植物の化石など（特にヒシの実が多く出土した。）
- 植物の化石など（特にヒシの実が多く出土した。）

が出土して、いわゆる動物骨格の化石床とでもいいう状態であった。

特に、鹿は四不像といわれるまことに珍らしいもので、森山台地と同時代の兵庫県明石から出たことがあり、日本で二度目の発見である。しかし、明石産のものは骨格化石でなく泥炭中のひずめの足跡であるため、森山は日本唯一の出土地であるといえる。

この四不像は一〇〇万年ほど前に地球上にいたもので、すでに絶滅していたものと思われていたが、中国の北京の禁苑で発見され、英國の宣教師がロンドンに持ち帰り繁殖させることに成功して飼育している。



風景 挖掘

※ この四不像という名の起りは左の通りである。

頭似馬非馬 蹄似牛非牛

身似驢非驢 角似鹿非鹿

そして、この地層につづく北一帯の平地が沖積層であつて、一万年ぐらいかかる中央構造線という断層の深い地溝帶に吉野川の埋積作用と地殻の隆起もあつ

てできたものである。そして、この地域が本町の生産活動・文化活動の中心地となつてゐる。

2、鴨島の土地に人はいつごろから住みついたか

最近、考古学の進歩により、洪積世の中ごろから人間の生存していたことが明らかになつてきた。

人類は地質学の洪積世に出現し、百万年も前に石器を使用し生活していたことが考古学で認められるようになつた。日本でも洪積世の終りごろ、石器を作つたり使つたりした人間が、広範囲にわたつて住んでいたことが明らかになつてゐる。

私たちが住んでいる鴨島附近は、歴史的にもたいへん古く、「日本書紀」や「古語拾遺」にも忌部氏との関係で、その名前が出ている。阿波の国は忌部氏が開拓した土地だともいわれてゐるが、それは神代の時代であったと書か

れている。神代とは、日本書紀に出てくる一番古い時代で、そのころに剣があり、鏡があり、はた織りがあつたと書かれているので、考古学的に考えると、弥生時代後期か、古墳時代にあたる。

しかし、最近の考古学の進歩によつて、実はもつとはるかに遠い古代から鴨島町に人が住んでいたことがわかつた。古代を大きく分類すると、旧石器時代（無土器文化）、新石器時代（縄文文化）、金石併用時代（弥生文化）、古墳時代と分けることができるが、その旧石器時代（このころはまだ土器をつくることを知らなかつたので無土器時代ともいう。）に人が使つていた石器が出てきたのである。

昭和五十二年（一九七七年）四月二十二日、西麻植の檀の原の（洪積層台地）突端で、本町の青木幾男が一つの石器を拾つた。それは剥片石器といふもので、ナイフ型石器によく似てい。ナイフ型石器は百二十度の角度から鋭く石を打欠いて、はがれた剥片の刃先を利用する石器の一つで、ナイ

フに似ているのでナイフ型石器といい、二次加工をしているのが特徴である。しかし、これには二次加工がないのでナイフ型とはいえないが、幾内、瀬戸内の特徴がある横打剥片であることなどから、時代はだいたいよく似ていると考えられる。

ナイフ型石器は今から一万五千年前から約二万年前の無土器文化の頃に使われたもので、洪積層時代にできた地層の上層部、いわゆる赤土山の台地の突端部で、飲料水が近くにあるような所から出土する。県内でもすでに十八ヶ所から出でているが、石器の材料は大部分が「サヌカイト」である。サヌカイトは香川県の屋島から丸亀附近にかけて出る石で、そのころの人がすでに香川と交流をしていたことがわかる。

この時代のものと思われる刃器（ブレイド）、尖頭器（ポイント）などの石器が昭和四十年（一九六五年）に川島町大字岡山の新池尻からも出でている。

（川島町史上巻一九四ページ参照）

こうしたことから、鴨島町には今から一万五千年ないし二万年前から人が住んでいたことがわかる。

第二節 繩文時代

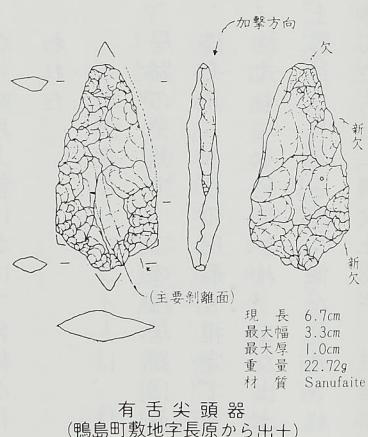
今から一万二千年ほど前になると縄文時代に入る。

そのころの人々は狩猟、漁労、採集による生活をしていた。この時代には縄目の文様のついた土器が多く使われ、これらは縄文式土器と呼ばれている。つまり縄文式土器を使っていた時代が縄文時代である。この時代は土器の研究によつて、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期にわけられている。

草創期には細線文土器という土器の外側に細い土の紐を張りつけた土器を

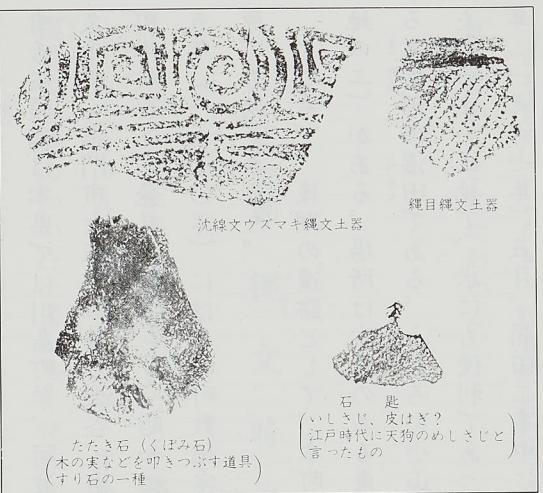
使つていた。その頃有舌尖頭器（有舌ボイント）という石器を使用していた。鴨島町から土器はまだ発見出来ていらないが、有舌尖頭器は本県では川島町学、阿波町久千田、鳴門市大麻町の檜原や大谷、由岐町木岐などに発見されており、昭和四十五年（一九七〇年）には、本町敷地字長原でも発見された。

ところで、後期の遺跡として、本町の東禅寺遺跡（西麻植字壇ノ原十八番地の二）がある。場所は古墳のある東禅寺山の東斜面が水田に没しようとする末端部の湿田である。うしろに小山を背負い、風水害の危険もなく、陽あたりのよい土地で、水にも便利であった。地主の平島桃作氏が、昭和四十二年（一九六七年）五月、開田工事中にたくさんの土器片を見つけたことから、



この遺跡が明るみに出た。

その後、鴨島町教育委員会が町の事業として、この遺跡を学術調査することになり、昭和四十七年（一九七二年）三月下旬から四月上旬にかけて発掘が行われた。



東禅寺遺跡出土品 繩文後期(約3千年～4千年前)昭和43年6月発見

だ、鴨島にも縄文があつたのだ」と大声で叫んだ。
縄文式土器が出土したという記録は、戦前に徳島城山の貝塚など三か所があり、戦後には前記の有舌尖頭器の出土したことはあるが、その時代の人々が住んだ遺跡は、戦後、那賀郡上那賀町古屋、三好郡三加茂町加茂谷、鳴門市大麻町森崎の三か所で発見されている程度で、本町の東禅寺跡遺跡の発掘は考古学上すばらしいものである。

第三節 弥生時代

弥生時代を一言でいえば、大陸から伝わった稻作と米食が、日本列島に住む人々の生活の基礎となつた時代で、およそ二千二百年前から千七百年前ま

での五百年間をさす。

稻を栽培するようになると、水の利用や水田の整備のために共同作業をするようになり、人が群がることから、村ができるてくる。

この時代のはじめ（前期）は、水たまりや湿田で稻を栽培していたため、平地部に人々は居住していたが、やがて人工的に水を調節するようになり、川をせきとめ、水路をつくり、居住地は小高い所にもひろまつていった。

土器も従来の暗い色の縄文式土器に代って、明るい色の弥生式土器が使われることになる。その主体はへら描沈線文土器とよばれるものである。これは土器の表面に竹べらや木片の先端をあてがい、動かして模様をつけたものである。模様には曲線や数条の直線があるが、いずれも一本ずつ描かれていることに特徴がある。

中期ごろには、谷や川に添つて集落もふえ村ができた。小さな国のはじまりである。土器にはまず回転台を使つた「柳描文土器」、つづいて「凹線文土器」が現われた。柳描文土器は一定の間隔をおいた柳の歯のようなもので模様がつけられており、線の間に一定の間隔があることが特徴である。凹線文土器は、回転台の上に土器を置いて、口縁や頸部に指先や鹿の皮を丸めたもので、凹線を一条から数条つけたもので、一条ずつつけていることが特徴である。

このころには、石包丁、磨製石斧、石鎌、石棒など石製品も使われた。

また、有名な銅鐸もこのころに現われる。その用途ははつきりしないが、村の最高の宝物であったようである。本県では、四十三個も出土していく、いわゆる銅鐸文化圏の中心になつており、本町でも森山や上浦から出土している。

後期には、土器が大量生産され、石器が減少し、鉄器が使われ始めた。鉄が農具に使われ始めると、生産も飛躍的に向上する。まさしく農業の時代が



銅 鐸

来たのである。

森山の三谷遺跡は、この弥生時代中期から後期にかけての遺跡である。三谷八幡神社の南方約五百メートル、八大龍王神社の付近から、道がやや山手にさしかかるところ、幅員二メートルばかりのその道の右側の道路添いの断層、地表から約三十～四十七センチばかり下つたところ（森藤＝後藤田寿雄氏の所有地）に土器が包含されていたようである。

土器には、壺、甕、高环など各種があり、凹線文のあるもので、香川県紫雲伝山遺跡の土器に酷似していることが特徴である。

本町敷地の赤坂遺跡からは、石棒などが発見されていて、古墳時代に移る前の弥生時代後期、今から約千七百年ほど前に人が住んでいた遺跡のようである。

第四節 古 墳 時 代

鴨島町の古墳は残念ながら大部分破壊されているが、記録や伝承によると、計四十基ぐらい発見されている。このうち半分以上は板石を箱型に組み合わせてつくる箱式石棺である。この形式のものが阿波に多いので俗に「阿波式石棺」とも呼ばれている。本県には板石をつくりやすい片岩系の石が多く分布していることにも関連があると思われる。

その中で東禅寺（西麻植字東禅寺）は、このあたりに十数基の古墳が群をなしていた。明治初期までに開墾され農地になつた時、ほとんど破壊されたが、その中の一基だけが現在も古墳跡として残されている。この古墳には、明治の末ごろまで「忌部さん」と称する小さな祠があつて、「忌部の角さん」という堂守がいたそうである。明治十四年（一八八一年）に、この古墳が正

式に発掘されて、長さ六尺（一・八二メートル）、横幅二尺（〇・六メートル）、高さ一尺六寸（〇・四八メートル）くらいの石櫻の中^{※2}に人骨、鏡、鎌刀などが出たが、すでに盗掘されていたので、他には出土品はなかつた。しかし、この付近の古墳からは鋭い剣、管玉、勾玉、鉄器、上器、矛、鐵斧、銀環などが出でている。これらのうち、大部分は現在東京国立博物館に保存されている。

昭和五十三年（一九七八年）五月二十九日、

本町山路字宮ノ南の丘陵から箱式石棺が発見された。地主の渡辺兼雄さんが宅地にするために整地をはじめたところ、地下二十センチのところから石棺が出てきたのである。棺は長さ約二メートルの石（側石）を平行に立て、その側石の間に長さ四十センチほどの石をH

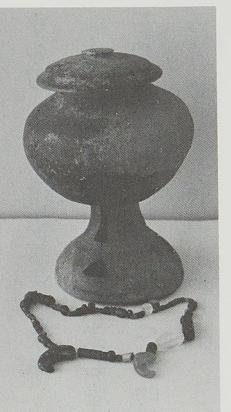
型にはさんで、側石が傾かないようにしている。（東中学校に保存）
石棺の内側は長さ百六十四・七センチ、横幅は東三十三・八センチ、西二十九センチ（広い方が頭）、蓋石は幅約七十センチ、長さ二百四十二センチの一枚石である。通常の背支けの成人を葬つたものらしい。副葬品などは発見できなかつたが、このような形で立派な古墳が町民の前に姿を現わしたのは、はじめてであった。

箱式石棺のほかに、堅穴式石室や横穴式石室といった構造の古墳もみられる。横穴式石室では、西宮古墳（敷地敷島神社裏）はその代表的なもので、今もその石室の石組みが残っている。敷島神社参道にあつた古墳からは、蕨手の刀（東京博物館蔵）、鉄鎌、鉄斧、鉄板なども出土している。

ところで、本町の横穴式石室では玄室空間をドーム状に広げるため、天井石の持ち送りを見るのは一般的であるが、なぜか玄室の隅を丸く構築している点に大きな特徴がある。



箱式石棺(東中学校)

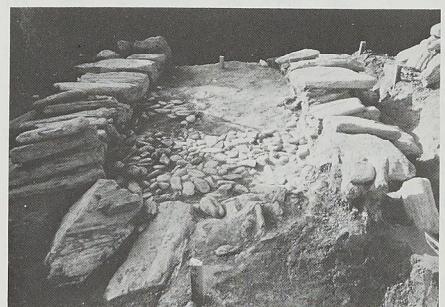


吐氣山古墳出土品

昭和五十八年（一九八三年）十二月に発掘された吐氣山古墳（西宮古墳より南方三百メートル）がある。ここがちょうど川島町との境界線上にあたつて

いて、川島町側が土をけずりとつていたのと、戦前に陸軍が演習で機関銃陣地の銃座として使用し掘り返していたので、一号古墳は八割がた壊れていて出土品は発見できなかつた。しかし、二号古墳は、羨道部と玄室の天井部が壊されていただけなので、鉄鏃、鉄片、メノウ、水晶、ガラス玉などで作られた首飾り二個分が出土した。また、この円丘の中のすぐ横にそつて二個の小さい天井石の持ち送りの石室が作られていたが、そのうちの大きい方から、肩部の少し欠けた台付高坏が一個と刀子が出土した。小さい方には何も入つていなかつたが、一つの円丘の中に大小三つもの石室があるのは県内では珍めずらしいものである。

また、このような横穴式で隅丸の特色ある古墳は、麻植郡の他の古墳からも見られるところから、地元の考古学研究者の間では、こうした石室を忌部山型石室と呼んでいる。忌部山型石室は、現在鴨島町から山川町にかけて、二十基あまりが確認されている。



隅丸石室

上浦の王子壇群もこうしたものかと考えられているが、現在消滅しており、確認する方法がないのは残念である。

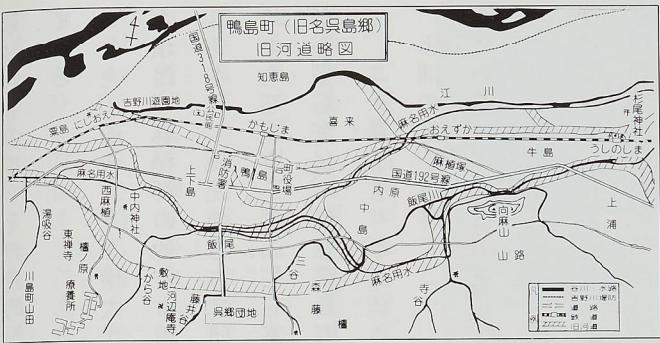
なお、時代的には阿波式石棺が古く、忌部山型石室はおよそ六世紀後半の築造と考えられていて、古墳時代の末期にあたる。このころには阿波、特に麻植郡では忌部氏が大いに活躍していたので、文字通り忌部氏造成の古墳と

考えられている。

ところで、この時代の鴨島の平野部の川の流れの状態はどうであつただろうか。

吉野川も飯尾川も自然のままに時には流れをかえ、時には州を作りながらひろびろと流れていたと思われる。現在でもその流れの跡は低地を伝わって、幾筋かの河道をたどるこ

とができる。



鴨島町(旧名呉島郷)旧河道略図

(1) 川島城の東北の方で吉野川から南に分かれた流れは、東禅寺山の裾から現在の麻名用

水の低地を東に流れるのと東禅寺山の裾をめぐつて河辺寺北から呉郷団地、森藤を経て、

山路で左折しつつ向麻山にぶちあたつて、向

麻山の北側を東に流れ、南の山麓方向や八本松の街並の南側や北側、あるいは現在の飯尾川筋に流れる河道。

(2) 西麻植駅の西の方で吉野川から分かれて粟島の南から、明治乳業の北側とユ藤館の間を東へ流れ、南折して麻植市と広畑の間を南へ行き、現麻名用水の旧河道に合する河道。

(3) 吉野川遊園地付近から東南に流れて上下島の北部を東へ、阿北消防署付近で県道を渡り、二つに分れて、一つは町役場から真東へ流れ、麻植塚駅付近から向麻山の北側へ行くのと、高原の森永乳業の南へ出るのと、八本松の方へ折れるのと、もう一つは蚕業試験場の南の方へ出て飯尾川へ当る河道。

(4) 鴨島商業高校の東の方から麻植塚へ抜ける河道。

(5) 牛島西覚寺の東の方から南へ流れて牛島駅の北へ流れる河道。

向麻山の北側、飯尾川の南岸付近には激流が渦を巻いた証拠として、そこに「忌部の芋搗岩」という石があつたが、これは「甌穴」のことである。川が激

流のため、岩にあたる小石が一ヵ所で回転して臼のような穴ができたもので古代にこの臼で芋を搗いていたことも伝説にいわれているようにほんとうにあつたことと思われる。この岩は惜しくも大正初期に麻名用水開さくの時に削りとられてしまった。

これらの流れと流れの間には自然堤防のようなものができ、旧鴨島地区や飯尾中央地区、西麻植中筋地区などの高州に人がぼつぼつ住みつきかけたのは、古墳時代からではなかつたかと思われる。鴨島町誌には、大正年間に飯尾敷地小学校付近から唐人方面にかけて、住居跡や弥生式土器が出土したらしいと記されているが、それを確認する土器というものは発見されていない。しかし、同小学校に保管されている須恵器や遺物の分布状態から見て、古墳時代に集落があつたことがうかがわれる。自然堤防や中島に人が住むようになつたのは集団の力で小さな川の流れを変え、河道を水田化するようになつたからであろうと考えられる。

また、山間部では谷川の水を引いて水田をつくることもあつたが、水田の多くは、水の流れていらない水たまりの上流に石墨などを置いて、洪水などの時に水に流されないようにした湿田であつた。



鴨島の古墳時代風景

経営主体は集団の共同耕作から家族單位（戸）の経営に変化し、土地の私有化が進みはじめていた。春になると、族長（集団の長）から「斎種」（氏神に豊作を祈つた種糲）を与えてられ、戸長はそれぞれ種を蒔き、秋になると最も早くみのつた稻穂をつみとつて、神社の玉垣に掛けならべて奉納した。そのことは今も春、秋に神に捧げる「初穂」の行事として残

つて いる。

こうして、鴨島付近でも米は多量に生産されたが、他の地域にも生産があり、又運搬困難などのために、特産品として物々交換の対象にはなりにくかつたと思われる。このころの人々は水稻のほかに畑に粟などの雑穀を植えて食糧とし、麻を植えてその纖維で衣服を織り、楮、梶の皮で紙を漉くことも知っていた。粟島、西麻植、呉島などの地名が残っていることは、その証拠とも考えられる。

村では鉄器をきたえることができた。東京博物館には、大正初期に敷地の敷島神社前方の西宮古墳から出たものとして、十五センチと十センチぐらいの長方形の鉄板数枚が保管されている。地域内で鉄が生産されたことを示すものとしてたまたま南部山麓地帯の丘陵地から、たたら製鍊の時にできる海綿鉄によく似たものを見ることがある。昭和四十八年（一九七三年）ごろに国立徳島病院（旧療養所）現本館付近でも七センチくらいのもの一個が出ていた。

る。また昔からここらあたりでたびたび付近の人が見て いる。

この病院の北方壇の原の土砂採取場の断層には鬼板とよばれる褐鉄鉱の薄い鉄板状の地層があり、また東山鉱山二号坑（敷地の下地地区）から「銀石」とよんでいた黄鉄鉱が出ていた。

忌部氏についてはつぎのような伝承がある。「日本書記」卷第一、天岩戸のくだりに、「天照大神の天石窟にこもりますに至りて諸々の神たちは中臣連の遠祖天児屋根命をつかわして祈りもうさしむ。天児屋根命はあまのかぐやまの神を掘り来つて上枝には八咫鏡をかけ、中枝には八坂瓊の曲玉をかけ、下枝には粟国（あさひ）の忌部の遠祖天日鷦命の作れる木綿をかけ、忌部首の遠祖太玉命をして執りもたしめて広く厚くたたえごとをのべ祈りもうさしむ」とあり、また斎部広成が書いた「古語拾遺」に「大和忌部の天富命が阿波忌部の天日鷦命の孫をひきいて、良い土地を求めて阿波の国につかわし穀、麻の種を植えた。ゆえに郡の名を麻植郡となす」とある。

これを見ると、阿波忌部氏は天孫降臨の時代から直接天皇に仕えていた氏族となつてゐるが、歴史家は忌部氏の活躍したのは古墳時代だと見ている。そして、日本書紀が養老四年（七二〇年）の成立であり、古語拾遺は大同二年（八〇七年）であり、その内容から斎部広成が自分の家の評価を高めるために書いたものだと考えられている。

忌部氏は元来、大和朝廷が行う祭祀に奉仕したり、その準備をする職能集團で、大和には中臣氏（藤原氏の先祖）とならんで祭祀を司る忌部氏があり、地方には阿波忌部のほかに讃岐忌部、紀伊忌部（ともに木工技術）、出雲忌部（玉造技術）、備前忌部（焼物技術）、伊勢忌部、筑紫忌部（製鉄技術）などがあつて、それぞれ技術集団をつくっていた。阿波忌部は木綿（楮の皮をはいで、その纖維をむして水に漬けこまかくさいたもので神に祈るときに「ぬさ」として神にかけ神前にささげる糸の束）をつくり麻や梶を植えて、その纖維で織物を織り、また桑を植えて蚕を飼い、絹を織つたと伝えられている。

しかし、麻植郡一帯はすでに無人の地帯でなく、また文化的にも大和と少し違った文化を感じることなどから、大和忌部が麻植を征服したり、あるいは支配したと考えるのは無理がある。それよりも、弥生時代からのつみかさねで麻植の人々にはすぐれた技術を受け入れることのできる態勢があつて、その一つが織物生産の技術であつたと考えられる。もともと簡単な経緯あみの平織は弥生時代から存在した。麻植には梶、楮など纖維植物も自然に生えていたので当然織物も作っていたはずであるが、そこへ古墳時代に大陸からのすぐれた織物技術が日本に伝えられ、それを我々の先祖はいち早く取り入れて、他の地方よりもすぐれた織物を生産した。そこから織物を通しての大政権との関係、祭祀にたずさわる「忌部」氏の呼び名が生まれたのではないか。いだらうか。

大嘗祭（天皇践祚の式典、御大典）に麻植の忌部が獻上するあらたえ（麻の布）は中央の忌部を通じてではなく、国司（現在の県知事）を通して直接に

献上

することからみても大和忌部の配下ではなかつたと思われる。

飯尾唐人にある呉羽神社は中国から來た織布技術者「くれはとりべ」を住まわせた土地であり、それを祀つた神社だと伝えられている。向麻山北麓にあつた甌穴を「芋搗岩」と言い、そのかたわらの幅広い石を「芋晒岩」といつていたのも古代から纖維に関係していたと考えられる。



呉羽神社

第二章 飛鳥・奈良時代

長い考古時代が終つて、いよいよ歴史時代に入る。歴史時代は朝鮮や中国から文化が伝わる飛鳥時代（六〇〇年ごろから）にはじまり、奈良時代（七〇〇～七九四年）へと展開する。この時代に、我が国に仏教がとり入れられて、文化が新しく栄え、国家の機構もしだいに整備され、官僚・文人・僧侶が活躍しはじめた。飛鳥時代には、中央では法隆寺が造られ、奈良時代には、薬師寺・東大寺・唐招提寺など今に残る名寺が造られた。また、国家の奨励もあって地方でも寺院が開設された。

この時代の阿波の寺院といえば、考古学的に発掘せられた遺構として、名西郡石井町の石井廃寺・国分尼寺、美馬郡美馬町の立光廃寺などがあり、文献に現われるものに麻植郡の菟山寺がある。すなわち奈良時代の仏教の説話を集めた日本靈異記に「光仁天皇（七七〇～七八一年在位）の代、麻植郡の人、忌部連板屋が法華經を書写して麻植郡菟山寺に施入した忌部首多夜須子の過失をそしつた罪によつて、顔が歪み終生なおらなかつた」という伝承をのせ

てはいる。この話が事実であったかどうかはわからないが、寺らしいものの存在は認めてよいようである。

次に、ここにも前記の忌部氏がでてきたが、忌部氏は古墳時代を終えた七八世紀も活躍したようである。忌部氏は元来大和朝廷に祭祀職を司る地位にあつたともいわれているが、その部族は全国数か所に分かれ、鉄工・陶工・木工・玉造・織物など、それぞれの技術を特徴とする技能集団をつくつていただといわれ、阿波忌部は織物の生産を司つていたようである。それに関するいろいろな伝説なども残つてゐるが、それを示す史料として、正倉院の御物として、天平四年（七三二年）に川島の忌部為麻呂が貢物としておさめた絶が今に残るほか、続日本紀によると、神護景雲二年（七六八年）には阿波国麻植郡の人で外從七位下の忌部連方麻呂と從五位上の忌部連須美など十一人が「宿禰」の姓を賜わり、大初位下の忌部越麻呂など十四人が「連」の姓を賜わつたことがわかる。

このような忌部氏は天日鷦命を祖神とし、中央の忌部氏が盛んであつた時代はその命をうけて「木綿」を栽培して、「荒妙」を中心送つていて、中央の忌部氏が衰えたこの時代には、独立した地方豪族として産業面にも力を伸ばし、実力をつけて勢威を張つたようである。

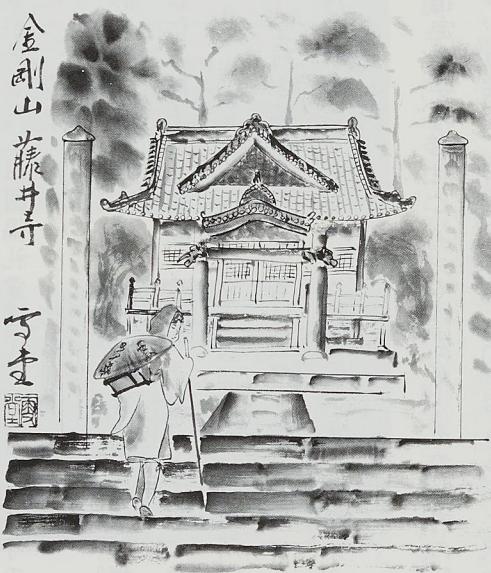
しかし、阿波忌部氏は、大和忌部氏の直接の配下ではなかつたのではないかという説もあり、今後の研究にゆだねたい。

第三章 平 安 時 代

平安時代は、九・十・十一・十二世紀とほぼ四世紀にわたるが、その初頭に、讃岐（香川県）から弘法大師空海が出て、仏教界に不滅の光をなげかけ、大師開基の真言宗は、民衆の宗教として次第に庶民の間にひろまつていった。

阿波には大師との関連を伝える真言寺院も多く、わが町の場合も例外ではない。有名な四国八十八ヶ所靈場は、弘法大師が開かれたという伝説を庶民は信じて、今も年間十二万人という人が順拝している。

本町には第十一番札所藤井寺がある。元禄二年（一



六八九年)に高野山の僧、寂本が誌した「四國徳礼靈場記」の中の藤井寺の項を紹介してみよう。

「金剛山藤井寺、この寺大師の啓迪なり。本尊薬師如來大師作。寺前鐘樓。傍に地藏堂・鎮守祠あり。下に仁王門を構えたり。今は禪者棲息せり。これによつて今之堂其宗の風に作れり。岩渓水清し潺湲として岩間段々に落る所。白藤の棚なども見るべきとぞ。堂前古藤あり。寺の名はとはでもしりぬべし。これによつて当時の閑静なたずまいと寺への人々の信仰、そして繁榮ぶりを想像することができる。

なお、本尊は本町唯一の国指定重要文化財となつてゐるが、その胎内の銘文から弘法大師の時代にまでさかのばらず、久安四年(一一四八年)に釈迦如來像として仏師経尋が作つたものであることが知られている。なだらかな両肩、大きく開けた胸部、円味を示す両膝、浅く刻まれた平行状の衣文などにこの時代特有の温和な風を示している。

そして当初は藥壺をもつていなかつたと思われるが、いつかの時代に藥壺をそえて、現在まで藥師如來となつてゐる。

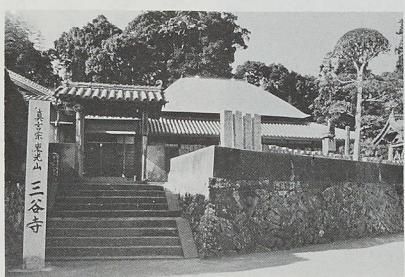
十一世紀から十二世紀にかけて、民衆の間にかなり仏教が浸透し、各地に寺が建立された。飯尾の持福寺・報恩寺・森藤の三谷寺・山路の仙光寺(もど蓮華寺)・牛島の宝王院(もど願成寺)・円通寺などもこの時代の創建と思われる。



持福寺



報恩寺



三谷寺



杉尾神社

されて、文献や口碑に伝えられている、かつての河辺寺（神戸寺とも書く）を立証した。現在、県指定史跡となつていてる寺跡は東西約五メートル、南北約二メートルの不正四角形の範囲であるが、かつての寺地はもつと広く、伽藍は山麓に美しい風姿を見せていたことであろう。

一方、わが国古来の神社についての記録を見てみよう。朝廷が康保四年（九六七年）に作つた延喜式の中に、諸国の著名な神社を登録しているが、そのなかに、阿波では五十座が見える。このうち、牛島の杉尾神社が旧の天水沼間比古神、天水塞比売神二座にあたり、西麻植の中内神社は旧の秘羽目神、足浜目門比売神の

ようである。その一例が敷地宇宮の北の河辺寺である。現在地表には何もないが、昭和二十九年（一九五四年）、地下から整然とならんだ十七箇の礎石と多数の古瓦が発見された寺もある

現在はなくなつているが、この時代に栄えた寺もある



宝院

このように見ると、旧村に二か寺程度は存在していたようである。ただし、持福寺は当初名西郡神山町阿川に、報恩寺は本町樋山地にあり、ともに江戸時代に現地に移建された。

そのほか、

現在はなくなつているが、

この時代に栄えた寺もある



河辺寺跡

二座にあたることはほぼ確実のようで、
わが町の誇りである。

なお、山川町の忌部神社は忌部族一同
の祖神、天日鷦命を祀つており、式内社
の中でも阿波には三社しかない大社の一
つであり、広く人々の信仰を集めたこと
であろう。

このように、この時代の人々は一方に
仏を、一方に神を信じて、ついに日本の
神は外国の仏の身代りであると考えるよ
うになり、神仏混淆思潮が風靡すること
になる。



中内神社

第四章 鎌倉時代



西 覚 寺



西 圓 寺



善 正 寺

鎌倉時代に入つて、仏教が次第に一般民衆の中へ浸透してゆき、真言宗とともに最ももつとも民衆に親しまれたのが親鸞を宗祖とする「淨土真宗」である。本町には西覚寺（牛島）、西円寺（麻植塚）、善正寺（山路）、徳住寺（喜来）、常教寺（鴨島）と五寺もあり、本町の進歩性を物語つてゐる。



寺
徳住
(一三三三年) 初期
に僧道元が入宗し帰
鎌倉時代(一一九二)

創建してから次第に
隆盛になつた。禅宗は武士の生き方と共通したものがあるので武士の間に普及したと思われる。

麻植保司に任せられた平康頼が禅宗寺院の玉林寺を建てたのも鎌倉時代の初期である。

西覚寺は、寺記によると開基は小笠原貫道で、寛喜二年(一二三〇年)にこの地に建立した「森の坊」がそのはじまりであるといわれている。また禅宗も平安時代に伝えられたものであるが、



常教寺



報恩寺の板碑

板碑(いたひ)というものは供養塔で、鎌倉時代から室町時代にかけて流行したもので、板のような細長い石の頂上を三角形に切り、その下部に横に二段の切込みと額部を作り、さらに下に身部を作つて梵字を刻み、南無阿弥陀仏の名号を中央に誌して、その左右に造立の趣旨や年月日を刻むことが多いのであるが、場合によつては、身部に阿弥陀如来・地藏菩薩などを現わすこともある。いずれにしても死者を供養する卒塔婆の変形である。約二千基もあるといわれる阿波型板碑は、ほとんどが阿波石の緑色片岩で作られてゐるが、鳴島町には古いものが多く残つてゐる。

飯尾の報恩寺境内には三基あるが、そのうちの二基は町内で最も古いものと、それに

つぐものがある。最も古い正和五年（一三一六年）のものは、長さ九十二センチ、幅四十七センチ、厚さ約四センチの法量であるが、上部にキリーケ（阿弥陀如来）、サ一人（觀音）、サク（勢至）の三尊の標識を刻み、それぞれに月輪光背をつけ、下部に「正和五年六月二十八日」と刻んである。つづく元亨

元年（一三二一年）のものも同様に、上部に阿弥

陀三尊の標識を刻み、月輪光背をつけ、その下部

に「元亨元年辛酉六月二十九日」と刻んである。こ

れによつてこの日に死亡した故人をしのんで建てたものであることがわかる。

上浦本行寺西側のものは正慶元年（一三三二年）

に作られているが、銘文中に「逆修」の文字が見

える。逆修というのは生前に自分の死後の菩提を

とむらうことで、この板碑は故人が生前に建てた



ものであることがわかる。牛島の西覚寺のものは「為沙彌守重靈位、永徳三年七月二十八日」とあり南北朝時代の南朝年号弘和三年、北朝年号永徳三年（一三八三年）の作で、沙彌（僧侶）守重の菩提のために造つたものであるから、この僧が西覚寺の先祖と考えると、西覚寺の歴史がしのばれる。

この外に鎌倉時代と考えられるものが二基、西麻植字中筋の小倉富夫宅の裏の辻に建つてある。

なお、供養塔に宝筐印塔・五輪塔などがある。今のところ町内にはこの時代のものは発見されていないが、五輪塔は多く建てられている。このころまでも、墳墓に墓石を建てることはあまり行われていなかつた。しかし、供養塔は供養のためのものであるとともに、また墓の所在を示すものとしても考えられたようである。五輪塔は上から「空・風・火・水・地」の要素、宇宙万物をかたちづくる総てを表現して、上から宝珠・半月・三角・円・方形の五つの形で作られている。この五輪塔は報恩寺にあるものが有名である。

つぎに、この時代の寺院の文化財にふれてみよう。

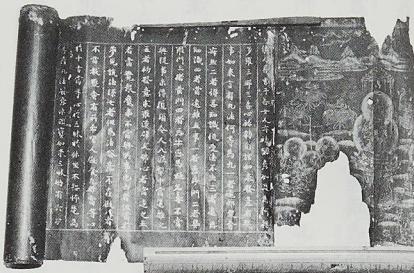
飯尾の持福寺の本尊阿弥陀如来像は、像高五十四センチの小像であるが、像全体に見られる均衡の良さ、温和な趣き、円味のある体貌、側面觀の扁平さなど古様を伝える鎌倉時代のものと考えられる。その構造は寄木造りで内刳があり、両眼は彫り眼とし、当初は漆下地の上に金箔を押していた様子がかがえる。

山路の玉林寺の釈迦十六善神画像は絹本着色、たて九十五、三センチ、よこ三十七、七センチの小振りのものである。一般的な図柄で釈迦如来・文殊・普賢の三尊を中心に、その左右に八体づつの護法善神と、前面に玄狂三歳と深沙大将などを描いている。おおらかな感じの作品でこの時代末葉のものと思われる。

この時代の経巻に、牛島、西覚寺の仏説宝如来三昧経一巻がある。紺紙に金泥で書いたもので、ややすくすんでいるが、なかなか美しいものである。見る

返しは上部に三山を描き、空中から奏樂散華している光景を示し、その下部に三人の菩薩を從えた釈迦が高座で説教している図柄を描いている。このお経は岩手県の中尊寺でつくられた経本である。

神社崇拜では、この時代には全国的に前代から引きつづいて、熊野信仰が盛んとなっていた。熊野信仰とは和歌山県の熊野本宮・新宮・那智のいわゆる熊野三山の信仰で、熊野の険しい山地行場となつた。ここで修行を積んだ山伏たちの法力はしだいに都の上層部の信仰を獲得するようになり、その結果上皇や多くの貴族が競い合つて熊野詣でをするようになつた。



西覚寺の中尊寺経

そして貴族が勢力を失うようになるにつれて熊野信仰は武士団へと移つてゆくのであるが、この熊野詣でのにぎわいは「蟻の熊野詣で」という俗語を生み出したくらいである。

山路の仙光寺は熊野信仰の修験の寺として有名である。この時代の古文書は見えないが、南北朝時代の熊野に関する古文書が数多くあるので、鎌倉時代の末期ごろはすでに熊野と関係が深い活動をしていたと思われる。

この時代の人物として本町に関係深いのは平康頼である。

治承元年（一一七七年）五月、平康頼は後白河法皇側近の法勝寺執行僧俊寛・藤原師光・藤原成親などとともに打倒平清盛の謀議を東山の鹿が谷でたびたび重ねていたが、このことが同志の一人の密告により発覚し、一味ことごとく捕えられて処罰された。康頼も藤原成経（成親の子）らとともに薩南の鬼界が島へ流されたが、配所のくらしも三年にして許され、なつかしい都へ帰ることができたのである。その後、平家の命運も次第に傾き、ついに文治元年（一一八五年）三月、壇の浦の海戦を最後に天下は源氏に移ることになる。

源頼朝が鎌倉に幕府を開くと、康頼は平氏の一門ではあるが、平清盛の討滅を図ったことや、康頼が尾張の国司であつた時、頼朝の父義朝の墓が荒れていいるのを見て修理したり、小堂を建て水田三十町歩を香料として寄付したことには感激して文治二年（一一八六年）その酬いとして康頼を阿波の麻植の保司に任じた。康頼は保司序を森藤に置いたが、その位置は春日免の一町地とも壇ともいわれ、はつきりしたことはわかつていない。

康頼は着任後は、後白河法皇や亡母ならびに鹿が谷の変で鬼界が島へともに流されて彼の地で死亡した僧俊寛などの靈をなぐさめるために、付近に鬼



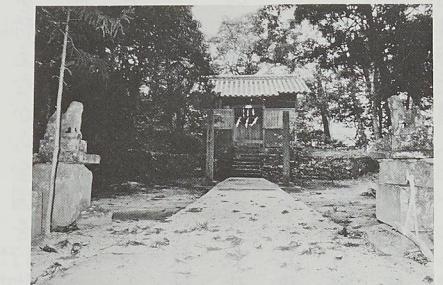
仙光寺

界山補陀落寺（伝説では広大な七堂伽藍を備えた）と慈眼山玉林寺の二寺を建立して朝夕その人たちの冥福を祈つたといわれている。平和に過していた康頼も、一つの事件が持ちあがつた。それは地頭野三刑部亟成綱との年貢受領に関する争いであった。これは康頼の請元に対する下地中分という幕府の裁きで両者が半分ずつ持つことで解決した。

康頼の死亡年月日は不明であるが、その死後、長子清基が麻植保司の仕事をついだ後、承久の乱（承久三年（一二二一年））が起つた。この戦いは後鳥羽上皇たちの京師軍と北条義時（はうじょうよしとき）の鎌倉軍との戦であつた。清基は阿波国守護（さと）佐々木経高（ささみきねりか）などとともに京師軍にくみした。戦は鎌倉軍が大勝して天下は北条氏のものとなり、阿波は佐々木氏に変つて小笠原長清（おがさわらながしげ）が守護となつた。小笠原長清は阿波に来て、清基が京師軍に参加したことを探り、鎌倉に訴えて清基を麻植保司の職から追放した。浪々の身となつた清基の子俊職（ひでのしょく）は、後に幕府に反逆して、祖父康頼が遠島された薩南（さつなん）の鬼界が島へ皮肉にも流されて

しまつた。

清基の弟康利（やまとし）は、遺族（いぞく）一同をまとめて、前に康頼が越前（えちせん）の国で三千石の私領として持つていた同国足羽郡（あすかわぐん）へ引きあげていつた。そして、現在の玉林寺（えんりんじ）の地に補陀落寺（ほだらくじ）をあわせて現在の堂塔が建立されたのは約三百年前の延宝年（えんぽうねん）間であると伝えられている。また、二百年ほど



熊野神社

前の天明（てんめい）のころ、康頼をうやまつて、その墓のあるところに神社を建て康頼を神として祀つたのが現在の康頼神社である。康頼が勧請（かんじょう）した寺谷の熊野神社は小祠（こうし）であるが、今もなおその孫であるという人々によつて祀られている。

なお、また日本佛教史上有名な伊予（いよ）の一遍（いつべん）上人（じょうじん）は時宗（じしゆう）をひらいて、念佛信仰（ねんぶくおんこう）を世に広め、民衆（みんしゅう）を教化（きょうか）し救濟（きゅうさい）しようとの大願（だいがん）をたて、踊念佛（おどるねんぶく）

を称えながら全国を行脚して教化につとめた。現在残っている一遍聖絵には阿波へ入つてからのところに「さていくほどもなく河辺というところにて六月一日より心神例に違し、寝食常ならずおわしまし」とあるから、おそらくこの河辺というのは敷地にあつた河辺寺のことであろうといわれている。この一遍上人も阿波の教化を最後に鳴門から淡路をへてその年の正応二年（一三八九年）八月二十三日、攝津兵庫の観音堂でなくなつた。

また平安時代末から鎌倉時代にかけて鴨島町に關係する有名な僧の伝説があるが、それは江戸時代に書かれた村邑見聞言上記の抜粋に「西麻植東禪寺山麓の大道（旧へんろ道）より十四～十五間（約三十メートル）ばかり山際に『かに泉』という湧水の泉あり。古老の伝説にいわれているように、昔西行法師が行脚のとき、この地に来てかの泉の水を飲まれようとしたとき折しも蟹がはい出してきたので、これこそ「かに泉」と名付けたらよかろうと言つて歌一首を詠まれた。歌詞は今に伝わっていないが、この泉の水は甘美で

近所の人々が飲料とした。残りは八畝（ハアール）余りの水を養っていたが、この田を作つていた人が、欲心のあまり他に流れるのを惜しんでその外側に土堤を築いて小さな溜池のようになしたところ、『水神』がこれをいましめるために水が乏しくなつた」と書きそえられてゐる。

西行法師（一一一八～九〇年）が鴨島に来た記録はないが、西行法師が四国を旅したのは仁安三年（一一六八年）十月、五十一歳から嘉応二年（一一七〇年）五十三歳のことであるから仮空の伝説とも思われないのである。



蟹 泉

第五章 南北朝時代

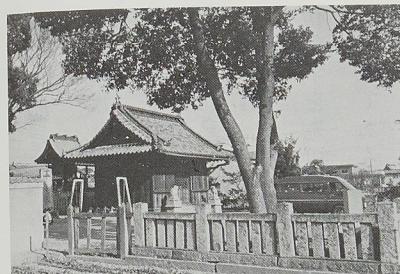
1、飯尾氏の活躍

鎌倉幕府が滅亡した翌年の、建武元年から明徳三年（一三三四～一三九二年）までの五十八年間を南北朝時代という。建武三年（一三三六年）正月三十日、北畠・新田の連合軍に敗れた足利尊氏が九州へ逃れる時、尊氏は細川和氏、顕氏を四国へ下らせて讃岐と阿波の經營に着手させた。細川氏は、足利義季を先祖とし、三河国（愛知県）細川村に本拠をおく鎌倉時代以来の足利一族である。

和氏は、土成町の秋月城に入つて阿波守となつた。秋月城は、それより七十年前の文永三年（一二六六年）に小笠原直長によつて築かれていた城である。和氏の阿波入りに、麻植・名西・板野など吉野川平野地域に住む武士たちはこぞつて馳せ参じたが、鴨島町の侍たちも和氏に忠誠を誓つた。その中でも有力な武人、麻植庄西方総領地頭の飯尾隼人佑吉連は弟の四郎為重ら一

族とともに、二月二十五日に秋月城に入り和氏に謁見して着到状を受けている。着到状は、出動したり、入城または軍列に加わった時に下される書状である。

この年建武三年（一三三六年）は二月二十九日に延元と年号が改元されたが、足利尊氏は九州で勢いをもり返し、夏に入ると大軍を率いて船で瀬戸内海を東進してきた。阿波細川軍もこれに加わり五月二十五日の有名な湊川の合戦に、兵庫の和田岬に陣をかまえた新田義貞と戦つてこれを破つた。飯尾勢も参戦して、着到状と軍忠状を拝受している。



飯尾神社

からだと言われ、後に摂津・山城・丹波・備中（大阪・京都・兵庫・岡山）などにも勢力がのびていったが、そうした地方へ進出するとき、その軍事力の中心となつたのは阿波と讃岐の地侍であつた。

讃岐の地侍に寒川氏がいた。細川家の臣となつたが、この者が京都の南にある東寺領の上久世荘にのり込んで、この荘園の土豪を追つぱらつて自分が莊官となり、細川氏が京都で足固めをするのを助けた。幕府がこの上久世荘の地を、あらためて東寺八幡に寄進したとき、飯尾彦六左衛門入道は、足利氏からその取り扱いを命ぜられている。

またこれより数年前、鎌倉幕府末期の元徳二年（一三三〇年）に、飯尾彦六左衛門が京都で、四郎太郎光守という強盗を捕えた時、^{※14}六波羅探題から感状を下されるなどこの時代の飯尾氏の活躍がみられる。しかし、この飯尾氏に関する古文書の大部分が県外にあるのは残念である。

2、阿波における南北両朝の戦

当時天下は南朝と北朝の両勢力が各地で入り乱れていたが、阿波の武士たちも、南北両朝に別れて複雑に入り組み、さらに数十年におよぶ争乱であつたので、双方の勢力分野も中央の状況しだいで、離合集散するありさまであつた。

大きく分けて、吉野川平野の麻植・名西・阿波・板野・鳴門など平野部に住む武士は、細川氏の支配下となつて北朝方。これに対し前の守護職、小笠原氏の一族であつた名東郡一宮氏を中心には、勝浦・名東・名西・麻植・美馬・三好各郡の山岳に住む武士は南朝に忠誠をつくし、阿波における南朝（吉野朝廷）の大きな支えとなつていた。

現在の徳島市と名東・名西の二郡をふくめて、三千貫（一万五千石）の領地を持つ一宮氏は、南朝方の指導的な立場であつたため、南北両勢力の戦い

の場は主として東部に集中しており、一宮城をはじめ八万城・宮井城・中津峯如意輪寺（いずれも現在徳島市）など南朝方のたてこもる城の近辺では、大小いくたの戦いがくり返された。やがてこれらの城は優勢な細川軍に一年の年月をかけてつぎつぎにおとされて行つた。

鴨島に住む武士たちも、これらの戦いにかり出されたのは当然で、飯尾沙弥心藏が觀応三年（一三五二年）五月二十日付で、軍奉行所へ差し出した軍忠申上書に、つぎのようなことが書かれている。

觀応元年（一三五〇年）十二月二十七日に八万城を攻め、翌年正月四日に城をおとしたこと、同年七月二十八日の東条合戦（八万城近辺）で小笠原（一宮のこと）宮内大輔を追い返したこと、そして同年十月、勝浦郡（当時）宮井城をおとして中津峯如意輪寺も攻めて寺院を焼きはらつたことなどが記されて、名東・勝浦両郡での戦いのはげしさを知ることができる。

この戦いで宮井城の岩松一族は全滅して果てた。しかし、南朝方山岳党の

東の要衝である一宮城は健在で、一宮城が細川軍に降つたのは、十年も後の貞治元年（南朝年号で正平十七年、一三六二年）であった。一宮氏が北朝に降つてからも、まだ麻植・美馬・三好の山岳武士団と細川軍との間に対立がつづいた。さらに十年後の南朝年号で文中元年（一三七二年）に木屋平の三木氏と小屋平氏が北朝に降り、さらに九年後の南朝年号で康暦三年（一三八一年）に、祖谷山の菅生氏らが降り、ここにようやく阿波全土は細川氏の支配するところとなつた。

建武以降、實に四十五年にわたる争乱であった。しかし中央では、まだ南北朝の対立がつづき両朝が統一されたのはそれから十三年後の明徳三年（南朝年号で元中八年、一三九二年）うるう十月二十五日のことであつた。

阿波における南北朝の長い戦乱といつても、つねに戦つていたというのではなく、中央や守護職からの下命にしたがつて、大義名分のもとで戦つたものであり、合戦が終われば将も兵も村に帰つて農耕にはげみ、食糧や武器をたる。

四国の南朝方の勢力を挽回するため南朝年号で興国元年（一三四〇年）夏、出羽国（秋田県）から新田義貞の弟、脇屋義助が四国南朝方の総大將に任せられ、その子義治と義広、義貞の二男義宗など、そうそうたる新田一族が相ついで伊予の川之江城に入城してきた。しかし不幸にして義助は二十日たらずで病死。その不運につけこんで阿波の細川頼春は、南朝方池田の小笠原氏を味方につけ川之江城を攻めた。川之江城は落城し義宗は伊予山中にかくれたが、脇屋義治・義広の兄弟は別れわかれに阿波の三好郡へ入つた。

義広は現在の池田町州津に東山城を築き、兄義治は井川町の地福寺に身を

よせていた。義広は、祖谷山岳武士の助力で八石城を築いて平地奪回をはかつたが果たせず、義治は、阿波郡日開谷へ移つた。北朝方細川氏の本拠秋月城とは歩いて二時間ほどの地に移つた義治に対し、細川方では戦力を全く失つた義治を討つでもなく、捕えるでもなくそのままにして置いた。

阿波山岳の武将たちはくらべものにならぬ天下の名門、新田一族の大將なら討ちとれば大きな手柄となつたであろうが、大義名分がないかぎり無力となつて戦意の失われた武士を、もやみに斬つて血族を根絶やしにするようなことは武士道的立場からしなかつたのである。間もなく義治は貞光山中に移り住み、九十六歳の高齢でなくなつた。しかし先に述べた宮井城岩松氏などは、城をまくらに徹底抗戦したために、一族はことごとく根絶やしにされ滅んでしまつた。

3、戦乱を支えた農民

莊園体制は、律令制度にかわる土地支配の方法で、その認否の権限は朝廷にあつたが、南北朝以前の鎌倉時代には、幕府が莊園領主の下に莊園内にすむ土豪や有力地侍を補任の職として、地頭や莊官に任命したり、別に幕府の御家人を派遣してこれに當て、ほぼ全国の土地支配と人事権をにぎつていた。

農民を直接支配している莊官や地頭たちは、自分の領地の安堵とひきかえに幕府への忠誠を誓つていたが、幕府が倒れて建武の中興後に南北朝の争乱がはじまるど、農村の支配者はまた領地の保障安堵のために、南朝か北朝のどちらかにつかねばならなかつた。

戦乱が農村のすみずみまで波及してくると、土豪や有力名主たちが武士となつて活躍し、それまで彼らの土地を耕していた名子とか間人とか、脇の者と呼ばれている農民たちは兵としてかり出された。足軽という呼び名もこの

ころから登場してきた。

正平二年（一一三四年）に南朝方楠木の一族で大塚惟正が味方の和田という武士にあてた書状の一部に、「里人や百姓の中で、壯健で腕の立ちそなう者には、みな武器を持たせて動員せられよ。」という内容が書かれており、また太平記に、「楠木・和田の一族和泉、河内の野伏共（百姓や野武士・あれ者など）を四五千人かり集めて」と書かれている。

しかし、農村に変化が起きた。これまで地頭や土豪たちは、広大な田畠を所有して名子や下人に耕作させていたが、戦いが続くと一番心配なのは農耕がおろそかになって、手入れや収穫が思いのままにならないことである。そこで、これまで使役してきた農民たちに土地を分け与え、そこから年貢をとりあげるという傾向が高まってきた。小作農民にとつて自分が土地を持ち、独立するということは長い間の夢であったから、農民たちは精を出して働くようになり、米・麦・粟・ひえ・大豆・小豆などの他に生糸・麻・楮などの

生産も向上して、それが農民はもとより地頭や土豪を富ます結果となつた。

この時代の地侍たちは、自らも土地を耕して食糧や諸物質を自給しており、合戦がはじまるごとに、家の子郎党や隸属する百姓を動員して戦に出かけた。したがつて南北朝の戦乱を支えてきたのは、底辺にいる地侍や農民たちであつたといえる。

戦乱は農村を貧困にし、多くの死傷者を出した。鴨島における土豪や地侍らとそれに従つた百姓や名子の者にも、数多くの死傷者が出了ことはまちがいないが、くわしいことはわかつていない。足軽たちの武器に槍がはじめて使われたのはこのころからである。